下、概略を記す（第23図）。

土師器　1～4は甕。1の口縁部は、ほぼ直線的に外反し、口唇部をつまみ上げて角ばらせている。外面は横撫で調整している。肩部は僅かに丸みをもち、外面に右下りの平行叩きを施す。2の口縁部も同様に外反する。3・4は肩部破片で、僅かに口縁部との接合部分が残っており、横撫で調整の痕跡が見られる。肩部外面には3が右下りの平行叩き、4が羽状の叩きを施す。5・6は壺か甕の底部。両方とも平底であるが、6は僅かに突出している。5は粘土を二重に貼り付けて成形している。以上の六点はひどく風化している。色調は2が黄褐色の他は赤褐色を呈する。7は手捏ねの皿で、内面と口縁部外面には撫で調整の痕跡が見られる。色調は黄褐色を呈する。1・3・4・6はH区、2はG区、5はC区、7はA区から、それぞれ出土した。ただし、4のみがⅢ層からの出土である。これら7点以外は細片のため原形を知り得なかった。

須恵器　8は坏で、僅かに八の字型に開く低い高台部を有する底部。外面には横撫で、内面には仕上げ撫でが施されている。A区出土。他は坏の蓋と甕の胴部破片である。

陶器は椀の口縁部で、施釉されており、貫入がみられる。

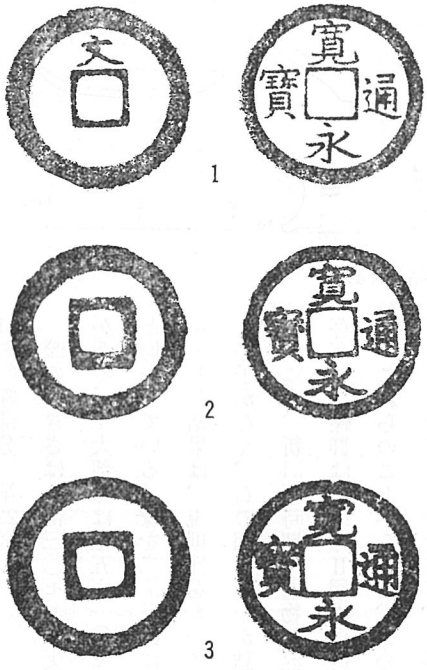
磁器9・10は共に伊万里。9は椀で、胴部から口縁部まで僅かに内彎しながら小さく開く。口唇部は薄い。灰白色の素地に暗緑色の下絵付文様がある。10は高坏で、脚部と坏部内面の一部である。脚部上半に、並行する二本線の下絵付文様がある。坏部内面には貫入が見られる。9はA区、10はB区出土。他は椀の口縁部や器形不明のものであった。

瓦は近世以降のもので、炻器はいずれも器形不明。砥石は長辺八センチ、短辺七・二センチ、厚さ五・六センチの長方形で、砂岩製である。

（佐藤利秀）

開成皇子墓整備工事立会調査

光仁天皇皇子開成皇子墓の石塔の基壇が、経年のためにゆるみを生じたので、その改修工事が行なわれ、昭和五十六年九月十四日の基壇解体の際に立会調査を実施した。当墓は勝尾寺背後の山頂にある宝篋印塔



第24図　開成皇子墓出土寛永通宝拓本（原寸）

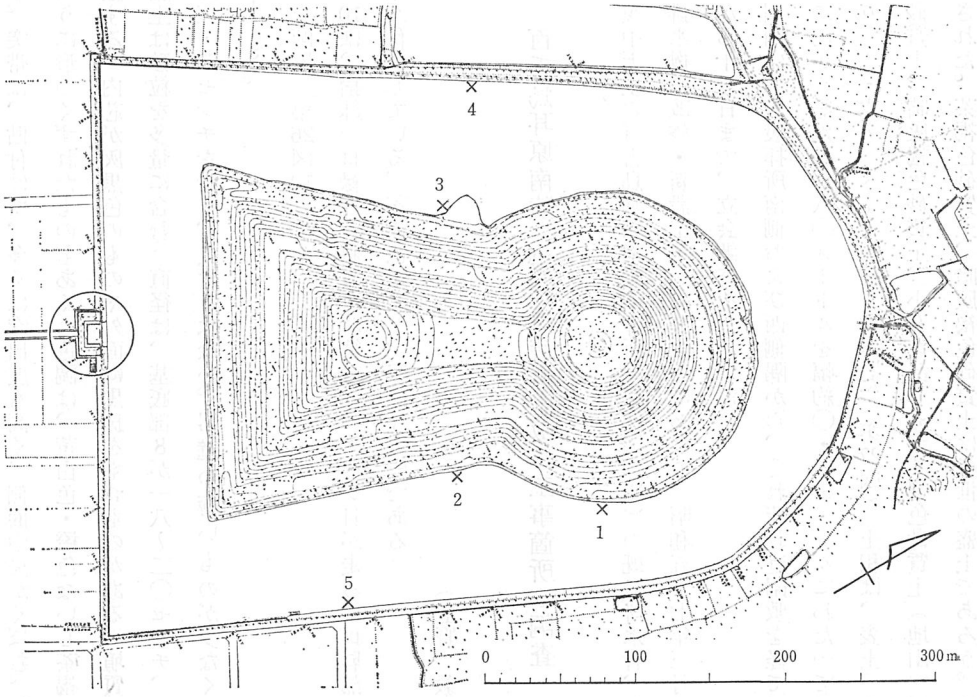
で、方約四メートル、高さ約九〇センチの方形基壇上に据えられている。基壇は大小の割石状の礫の野面積みで、解体はゆるみを生じた基壇の周辺部に限られた。礫を除去したところ石塔の正面を中心とした表面に近いところから、現在通用の貨幣が現われ、更にその下部の表面より深さ一五～四〇センチの間から、古銭二十四枚が検出された。かつて賽銭として奉納されたものであろう。銭銘は何れも寛永通宝で、(1)背に「文」の字のあるいわゆる文銭が六枚、(2)背の二箇所に細い線をあらわしたもの一枚、(3)背に文字のないもの十七枚である。(2)及び(1)(3)について各一枚づつ拓本を示す。

（戸原純一）

百舌鳥耳原南陵外堤護岸基礎補修工事の落水による濠内表面調査

履中天皇の百舌鳥耳原南陵における外堤内法の既設護岸の基礎は、栗石が流出して傷みが甚しいので、復旧工事を施すこととなった。このために濠水を落したところ、水没していたところに遺物が散布していたので、昭和五十七年一月七・八日に採集した。

遺物が散布していたのは、第25図に示す墳丘裾三箇所と外堤内法裾二箇所の計五箇所である。遺物の多くは、それぞれ墳丘・外堤の上部から転落したものであろう。



第25図　百舌鳥耳原南陵採集・調査箇所の位置（1/5000）